

# 音楽とコミュニケーション

吉永 誠吾\*

## Music and Communication

Seigo YOSHINAGA

### Abstract

In general, we learned that the left brain deals with languages, while the right brain deals with music. However, in the relation between music and brain, we also know that a person who learns music deals with music in the left brain, too. I suppose that the people who learn specific music may grammatize music using the left brain (language brain). Music expresses our emotions, so the person who learned specific music education might grammatize feelings. In other words, the person can express his or her feelings very well to others and deeply understand others as well. In this essay, based on my study, I would like to present that through music education, we can enhance our communication skills.

### はじめに

筆者はすでにこれまでの論文や著書において一貫して、音楽が心のコミュニケーションとして果たし得る役割について述べてきた。ここに大変興味深い研究報告がある。それは専門的な音楽教育を受けた人は左脳でも音楽を処理しているということである<sup>1)</sup>。左脳は一般的には言語を処理しているのであるから、専門的な音楽教育を受けた人は音楽を左脳を使って文法化しているであろう。音楽が表現するものは感情であることを考えると、音楽家は感情を文法化する能力がありそうである。従って、ここに大変興味深い仮説が提示できる。つまり、専門的な音楽家は感情を文法化することによって上手にコントロールする能力があるということである。この仮説はさらに、右脳、左脳のバランスを保った理想的な人格形成を促すような教育を考える上でも、重要な示唆を含んでいると考えられる。もしそうであるならば、閉じこもったり、切れたり、暴力に走ったりする子供達に音楽教育は大きな救いの手を差し伸べることができるかもしれない。そこで、筆者のこれまでの研究結果などを踏まえながら本論文においてそのことを立証したいと考える。

### I 音楽の文法化と感情の文法化

#### 1 音楽の文法化

専門的な教育を受けた音楽家が左脳を使って音楽を文法化していることは実に明らかである。まず、楽譜を読むことによって音楽家は演奏しようとする楽曲の構造を理解しなければならない。その楽曲がソナタ形式なのかフーガなのか、重要なモチーフはどのようなメロディなのか、またどのような転調がなされるのかなどということは当然左脳で処理されるであろう。さらに今度は、全体のテンポを決め、どの部分でどのようなクレッシェンドやディミヌエンドをするか、曲の山場をどこにもっていくかなど、演奏に必要な曲の表情をどのようにつけるかも当然左脳で処理されるであろう。そして最後に、その楽曲にどのように感情移入をするかが試され、十分に音楽表現が練られた上で公開の演奏会が開かれるはずである。このような一連の作業はいやしくも音楽家と自称するものの守るべき最低限のステップであると言えよう。

#### 2 感情の文法化

感情の文法化という言葉が妥当であるかどうかはともかく、感情をうまく表現することが人間の重要な知性であることはダニエル・ゴールマンによって指摘されている通りである<sup>2)</sup>。そこで、ここでは感情を相手に上手に伝えることができ、同時に相手の

\* 音楽教育科

感情を読み取ることができる能力を感情の文法化と呼ぶことにしよう。

しかし、この感情の文法化がうまく教育されているという保証はどこにもない。現在の我が国の子供達がおかれている状況についてもすでに述べたとおりである<sup>3)</sup>。多くの子供達が自分の気持ちを上手に伝えられずに苦しみ、問題行動に走ってしまうのであろう。心の教育の大切さが叫ばれるが、その有効な処方箋が示されている訳ではない。筆者自身ですら、子育てについては反省することが多く、決して成功したとは思っていない。幼児教育の重要性についてはすでにその一端を述べたが<sup>4)</sup>、もっと早くからこのような認識があればさらに立派な子育てができたに違いない。まして、今まさに子育て真っ最中の親たちの中には思うがままにならないわが子を抱え、とんでもない子育てをしている大人が数多くいる可能性がある。その結果、マスコミを騒がすような事件を起こしてしまっているのであろう。我が国の教育において、あるいは世界の教育において感情の文法化の重要性こそが今叫ばれるべきである。

劇や映画などの俳優が演技をするとき、彼らはあたかも本当に愛しているかのように、あるいは憎んでいるかのように演じている。でなければその演技は白けてしまい、観客の感動を呼ばないであろう。しかし俳優たちは本当に愛しているわけでも、あるいは憎んでいるわけでもない。けれども音楽では本当の感情を表現しても一向に差し支えない。だから音楽の表す感情は本物であり、また、逆に何も感じていない人の演奏からは何の感動も与えないかもしれない。従って真の音楽家は感情表現のプロだと言える。もしかしたら専門の音楽教育のノウハウをうまく利用することができれば、上手に自分の感情を表現できない子供達に、大きな救いを与えることができるかもしれない。

## II 音楽のもつ偉大な力

音楽がもっている偉大な力についてはすでに述べたことも含めてここで改めて整理してみる。

### 1 ショーペンハウアーの言葉

ショーペンハウアーが音楽について述べていることはすでに取り上げた。彼は人間が願望をもち、その願望を満足させてもまた新たな願望をもち、苦悩し努力しながらやはり満足を求め続けることと、音楽のメロディが様々な道をたどって元の主音（根音または基音）に戻ることを重ね合わせている。その

うえで彼は『音楽が表現しているものは喜びというもの、悲哀というもの、苦痛というもの、驚愕というもの、歓喜というもの、愉快というもの、心の安らぎというもの、それ自体なのである。』と述べている<sup>5)</sup>。つまり、音楽は人間の感情そのものを表現するのである。

彼はまた、『すべての芸術は音楽の状態にあこがれる。』とも述べているが<sup>6)</sup>、この言葉の意味は、あらゆる芸術の中で音楽ほどの感動を与えるものは他にないということを行っているのであろう。

### 2 和声進行の力学的運動

島岡理論によって和声進行が私たちの情動的な動き、『安定→不安定→安定』、すなわち緊張の増加または感情の高揚と緊張の弛緩または感情の沈静と連動していることについてもすでに述べた通りである<sup>7)</sup>。チャイコフスキーの音楽は私たちの心を激しく揺り動かすが、それは彼の見事な転調のテクニクがなせる技なのである。

### 3 感動のメカニズムの医学的根拠

音楽とβエンドルフィンについてはすでに述べた。私たちが音楽や演劇で大きな感動を覚えているとき、脳の中ではβエンドルフィンが分泌されている可能性がある。野菜や果物の栽培、動物の飼育、焼酎の醸造、1/fゆらぎやα波とクラシック音楽の効能などについても数多く語られている。要するに音楽の効能についての医学的根拠ははっきりしているということである<sup>8)</sup>。

以上のことから音楽が人の心を動かし、感動を与え、心を通じ合わせるといふ、心のコミュニケーションとして大きな力を発揮するであろうことは、実にはっきりしている。言い換えれば、哲学者の言葉からも、音楽理論からも、医学、生理学の立場からもこのことが裏付けられたと言える。

## III 音楽と生活との結び付き

### 1 トルストイの芸術論

トルストイは当時のヨーロッパで流行していた芸術に対して鋭い批判を浴びせている。彼はまず始めに、オペラの下稽古に行ったときの感想を述べている。その下稽古では指揮者が口汚くののしりながら、何時間にもわたって細かい練習を続けている様子が述べられている。その上で彼はそのようなオペラが多くの人数と費用や時間を費やされるだけの価値が果たしてあるのかという疑問を投げかけている。彼

は次のようにその感想を述べている。

『別に考えもしないのにこんな疑問が浮かんで来る。あれは誰のためにやっているのだ。一体誰の気に入るのだ。そのオペラの中の処々にでも聴いて気持ちのいいような美しいテーマがあるというなら、率直にそれを歌えばいいわけで、何もあのばかげた衣装や行列や歌のせりふや手振りはいらないはずだ。ことにバレで半分裸体の女がしなを作って纏れ合って肉感的な花飾紐のいろいろな形を見せるのは全く堕落した演技だ。だから誰を目当てにしているものかどうしてもわからない。教育を受けた人には我慢のできない退屈なものだし、本当の労働者には全くわからないものだ。あれが気に入りそうなのは、それも随分怪しいが、上流階級の心持ちにかぶれていながらまだ上流階級の満足を知らずにいる人々か、自分の教養を見せびらしたがる職人か、それとも若い従僕ぐらいなものだろう。それにこんなすべていやらしいばかげたことの準備をするには、人のいい快活な無邪気な心持ちがないばかりか、そこに意地悪や獣のような残酷な気持ちまではいつている。

それは芸術のためにやっているのだとか、芸術はごく大切なものだとか言う。しかし、それが芸術だということ、芸術がそれほど大切なものでそのためにあれほどのものを犠牲にしても構わないということは一体本当なのか。』

トルストイがこのように述べている<sup>9)</sup> 真意は“見せかけの芸術”と“本物の芸術”の区別をはっきりさせたいからであって、決して芸術そのものを否定しているわけではない。トルストイに言わせれば、“見せかけの芸術”とは権力も富もあり、働かなくてすむいわゆる上流階級の人々が自分たちの慰みにしているものであって、“本物の芸術”と区別される。彼によれば“本物の芸術”とは『一度味わった心持ちを自分の中に呼び起こして、それを自分の中に呼び起こした後で、運動や線や色や音や言葉で現される形にしてその心持ちを伝えて、他の人にも同じ心持ちを味わうようにすると同時に、芸術の働きがある。芸術とは、一人の人が意識的に何か外に見えるしるしを使って自分の味わった心持ちを他の人に伝えて、他の人がその心持ちに感染してそれを感じるようになるという人間のはたらきだ。』と述べている<sup>10)</sup>。

彼は当時の美学論争を引き合いに出し、芸術とは

その中で論じられているような“善”でも“美”でも“真”でもないとしている。

また“見せかけの芸術”がはびこるのは(1) 芸術家はその作品を渡す代わりに受け取る相当な報酬、またそれを元とした芸術家の職業化、(2) 芸術批評、(3) 芸術学校がその原因であるとしている。

(1) についてトルストイは『ヘブライの予言者や詩篇の作者やアッシジのフランチェスコやイリアスとオデュッセイアの作者やすべての民話や伝説や民謡のように、自分の作品を出すだけで少しも報酬を貰わないばかりかそれに自分の名さえつけない人たちが作る場合と、作品を渡して名誉も報酬も受けていた昔の宮廷詩人や宮廷戯作者や宮廷音楽師や、自分の腕で稼いで、新聞記者だの出版屋だの興行師だの、一般に言えば芸術家と芸術を注文する町の人々との間に立つ仲介者から、報酬を貰っている登録済の芸術家を作る場合とでは、その間にどのくらい違いがあるものかということ誰にもわかる。』と説明している。

(2) については『芸術家が本当の芸術家ならば、自分の作品の中で他の人たちに自分の味わったその心持ちを伝えているわけだから、そこに何の説明することがあろう。』と述べ、『芸術家の作品は、解釈することはできない。芸術家が言いたいと思った事を言葉で解釈することができるとすれば、その芸術家も言葉で言っているはずだ。』とも述べている。

(3) については『芸術が民衆のための芸術でなくて、金持階級のための芸術になると、それは職業になるし、職業になると、その職業を教える丹念な方法が考え出されて、芸術を職業として選んだ人たちはそういう方法を習うものだから、職業学校ができて来た。…略…こういう学校では芸術を教える。ところが芸術は芸術家の味わった特別な心持ちを他の人に伝えることだ。それだのにそれを学校で教えている。

どんな学校でも人にそういう心持ちを起こさせるわけには行かない。まして、自分の特別な自分だけに具わった仕方での心持ちを現わす芸術というものを人に教えることは尚更できない。

学校が教えられるのは、別の芸術家が味わった心持ちを別の芸術家が現わす通りに現わすということだけだ。そうして丁度それを芸術学校では教えているのだが、この教育は本当の芸術を弘める役に立たないばかりでなく、却って逆に、芸術の面を被った偽物を弘めて、本当の芸術がわかる力を人間になくさ

せることにかけては、他のどんなものよりもひどい。」と述べている<sup>11)</sup>。

音楽については彼はワーグナーやR・シュトラウスはおろか、ベートーヴェンの後期の作品も見せかけの芸術であるとしている<sup>12)</sup>点についてはさまざまな意見もあるであろう。しかし、少なくとも自分が芸術家と称するのであれば、トルストイのこのような疑問に対してきちんとした自分の答えを私たちは持っていなければならないと言えるであろう。

## 2 エマーソンの言葉

エマーソンは『単なる詩人の句は最善とは思えないが、その人がひとたび科学的な基礎を知り、その光彩を浴びるとき、その詩は始めて、すぐれたものとなる。』と述べている<sup>13)</sup>。前述したトルストイも『科学と芸術は互いに、肺と心臓のように、密接に結びついているから、一方の器官が悪くなると、もう一方も正しくはたらくわけには行かない。』

『本当の科学は或る時代或る社会で、一番大事だと考えられた真理や知識を研究して、人間の意識に持って来るものだし、芸術は、その真理を知識の領分から感情の領分に移すものだ。』とも述べている<sup>14)</sup>。このことは科学も芸術も互いに関係なしに存在し得ないということを意味する。言い換えれば、科学が左脳であれば、芸術は右脳であり、それは互いによりバランスを保つことによって、理想的な人格形成を促していると言えよう。したがって芸術家の活動にも科学的、客観的な根拠が要求されるということだ。

## 3 生活の中の西洋音楽

筆者が二回にわたってヨーロッパで過ごしたときに最も切実に感じたことがいくつかある。その中の一つに春を迎えたときの人々の喜びというものがある。私たち日本人からすればヨーロッパは半年が冬で、後の半年に春、夏、秋があるという感じであろう。冬の寒さは大変厳しく、それだけに春を迎えたときの人々の喜びはひとしおというものである。シューマンの歌曲集『詩人の恋』の第一曲に“Im wunderschönen Monat Mai (美しい五月)”という歌曲がある。厳しい寒さが緩みはじめ、やがて訪れる春に胸をときめかす気持ちはそこで暮らしてみても始めて実感できるものであろう。

筆者はフンパーディンクのオペラ『ヘンゼルとグレーテル』を家族をつれてバイエルン国立歌劇場に二度、観に行った。それは題材が子供達も良く知っ

ている童話であり、少しづつわかりかけたドイツ語にもなれ、十分楽しめると思ったからである。このような経験はドイツ滞在中の私たち家族の大変よい思い出となっている。ヨーロッパに住んでいると、西洋音楽というものが全く違和感なく感じられる。それはおそらくその芸術作品が優れているか、あるいは平凡な作品であるかにかかわらず、日常生活の中から生まれてきているからであろう。歌劇『ヘンゼルとグレーテル』も、いわば子供達に大変なじみの深い童話が題材となったオペラである。私たち日本人にも、もっと生活に密着した、あるいは子供達にも親しみやすい作品が求められる。

西洋音楽が大変優れているからとはいえ、日本の音楽大学がこぞってイタリア歌曲やドイツ歌曲、あるいはオペラを勉強させていることに対し、どうして疑問を感じないのであろうか。私たちはふだんイタリア語やドイツ語を使って生活しているわけではない。言葉そのものがまさに非日常的であるばかりでなく、作品そのものが表現しようとしているものは、西洋人が自分たちのふだんの生活の中から感じているものであって、日本人のそれではない。西洋音楽を理解することと、ただ称賛することとは同じではない。日本と西洋の音楽の特徴の違いについてはすでに筆者の考えを述べた<sup>15)</sup>。西洋人の生活に西洋音楽がよく似合っているように、日本人に似合った音楽が別にあるかもしれない。筆者はここであらためて、私たち日本人が日常生活で実感できる音楽作品を現役作曲家たちに求めたい。

## 4 多重構造社会と芸術文化の閉鎖性

多重構造社会の中では互いの文化は伝わりにくい。特に身分階級がはっきりしている時代にあっては、なお一層その傾向が強い。例えば貴族、武士、庶民はそれぞれ独特の文化を持ち、それをかたくなに守っているから、それぞれが互いに影響し合うということが非常に少ないのである。例えば奈良、平安時代に貴族の中で栄えた和歌なども庶民にとっては全く関係のない別の世界である。雅楽は我が国の伝統音楽の一つであるが、それはあくまでも宮廷の音楽であって、決して庶民のそれではないことは十分認識されなければならないであろう。したがって、そのようなことを無視して子供たちに雅楽を鑑賞させても、子供たちに理解されるはずがない。

我が国において、西洋のクラシック音楽が好きな人々、あるいはそれにたずさわっている人々は、その人たち独自の閉ざされたグループをなしているよう

に思われる。そしてそのほとんどが西洋クラシック音楽を称賛はするものの、本当に理解はしていないように思われる。そしてそのほかに西洋クラシック音楽とはほとんど縁のない庶民がいる。彼らにとってはカラオケの方がより親しみやすいのである。このように芸術文化が互いに閉ざされていて交流が無いのは、それが生活実感から程遠いものになっているからであろう。トルストイの指摘は今まさに我が国のクラシック音楽界に当てはまるといえよう。

## 5 生活に密着した芸術とは

音楽を私たちの生活にもっと密着したものにするためにはどうしたらよいであろうか。筆者はすでに手作り楽器を通じて子供達が遊びから音楽の学習へ進んでいく道を示した<sup>16)</sup>。筆者がここで特に強調したいと思ったことは、音楽を最初から高等な芸術として考えるのではなく、例えば、身近な材料を用いて音を出して遊ぶことから出発し、学校での音楽の学習に対しても自然に興味関心をもてるような道筋を子供達に示してあげることであり、そのような道筋からごく自然に芸術音楽に対し、興味関心もてるように子供達を導いてあげる、ということである。

芸術音楽についても同じことが言えるであろう。気候風土が全く違う西洋と日本では音に対する感覚も違って当然である。同じ曲目の同じ演奏でも場所が違えば響きも違って聞こえる。とすればそれは違う音楽であるはずだ。日本人の肌合う、日本語に合う、日本の生活に溶け込む、そのような音楽が求められる。

## IV コミュニケーションとしての音楽の役割と可能性

少子化の今日、同じ年代の子供達同士が集まって遊ぶ機会も場所も非常に少なくなってきている。子供達が社会性を身につけるためには、できれば3歳ぐらいから幼稚園などに通うなどして、集団の中で社会生活が学べるのが望ましいと言えるであろう。そのような集団の中で、お互いに自分の意見を主張し、同時に相手の意見にも耳を傾けることができるような社会性が育まれ、コミュニケーションの能力が養われるのではなかろうか。コミュニケーションができるかできないかということは、私たちが幸福に生きていけるかどうかということと直接関係していると言えるであろう。

人は言葉でコミュニケーションを行っている。確かに言葉は人間の意志をはっきりと伝えることがで

きる。しかし、同じ言葉を発したとしても人それぞれの思いは様々であろう。したがって、思っている気持ちをうまく伝えることができるかどうかはわからない。問題行動を起こす子供達の多くはおそらく、自分の気持ちが上手に伝えられず、他人の気持ちもよく理解できずに、閉じこもったり、暴力に走ったりしていると思われる。

筆者は先に、音楽の文法化と感情の文法化ということについて述べた。感情の文法化とはすなわち自分自身の感情を客観的に理解することにほかならない。言い換えれば、相手を傷つける事なく自分の思いを正しく伝えることができるということである。あくまでも仮説に過ぎないが、音楽を勉強することによって感情を客観的に理解する能力を伸ばすことができるかもしれない。音楽や演劇の学習は子供達の感情の表現力を高める上で、大いに役に立つであろう。

鳥や哺乳動物もコミュニケーションを行う。しかし彼らは言葉を持たない。したがってそのコミュニケーションは言ってみれば感情の(動物の場合情動の)コミュニケーションであると思われる。おそらくその鳴き声の調子を様々に変化させることによって、自分の意志(あるいは気持ち)を伝えているのであろう。人間の場合、言葉を通じるためにかえって気持ちが通じないということがありそうに思われる。もしかしたら言葉のコミュニケーションよりも感情のコミュニケーションの方が優先順位が高いのではなかろうか。というのは、動物の情動のコミュニケーションの方が人間の言葉のコミュニケーションより先に存在したと考えられるからである。

子供達の心のコミュニケーションの能力を高める必要がある。そしてそのために音楽が重要な役割を果たす可能性がある。そのためには音楽は私たちの生活の中にとけこむようなものでなければならない。

## 注

- 1) M・クリッチュリー/R・A・ヘンソン編、拓殖秀臣/梅本堯夫/桜林仁 監訳『音楽と脳Ⅰ』、サイエンス社、昭和58年、p.197-198.
- 2) ダニエル・ゴールマン著、土屋京子訳『EQ~こころの知能指数』、講談社、1996年
- 3) 拙著『環境が子供の成長に与える影響についての一考察』、熊本大学教育学部紀要、第50号。平成13年
- 4) 同書。
- 5) ショーベンハウアー著、西尾幹二訳及び責任編集『意志と表象としての世界~世界の名著(続)10~』、中央公論社、昭和62年、p.482-485.

## 音楽とコミュニケーション

- 6) この言葉は供田武嘉津著『音楽教育学』, 音楽之友社, 昭和50年, p. 43にあるが, そのもともとの出典は記されていない。
- 7) 拙著『音楽教育—感動と心のコミュニケーションを求めて—』, 教育芸術社, 平成10年, p. 65—67.
- 8) 拙著『脳と心と音楽教育—教員養成のための音楽教育研究—』, 熊本大学教育学部音楽科編, 教育芸術社, 平成10年.
- 9) トルストイ著, 河野与一訳『芸術とは何か』, 岩波書店, 昭和42年, p. 11—12
- 10) 同書, p. 61.
- 11) 同書, p. 148—155.
- 12) 同書, p. 152—154. 及び, 213—215.
- 13) この文章については講談社のしおりに書かれているものであるが, 出典は不明である.
- 14) トルストイ著『芸術とは何か』, p. 244.
- 15) 拙著『建物の構造が音楽の様式に与えた影響についての—考察』, 熊本大学教育学部紀要, 第44号, 人文科学, 平成7年, p. 65—72.
- 16) 拙著『環境が子供の成長に与える影響についての—考察』, 熊本大学教育学部紀要, 第50号. 平成13年, p. 84—86